

砂沙美、福引きを当てるのこと

チリリーン！

「大当たりー！」

周囲の人が歓声を上げ、拍手を送る。

「おめでとう、お嬢ちゃん」

そう言っつて、おじさんは商品を渡してくれた。

「どうも、ありがとう」

砂沙美は笑顔で答えると、軽やかな足取りで、照れながらその場を後にした。

「商店街の福引き？」

家に帰るとソファーに寝そべっていた魍呼がむっくりと起き上がって尋ねて来た。

「うん！当たったんだよ。それでね…」

と、砂沙美が話を続けようとすると、

「え、当たったんですか？確か、一等は温泉宿ペア宿泊券でしたよね？」

美星が歓喜した。

「うん、でもね…」

砂沙美が美星を制して続きを言おうとすると今度は、すかさず姉と魍呼が割り込んだ。阿重霞はそれまで読んでいた料理本を置き、魍呼はテレビのリモコンを放り投げて砂沙美にすり寄って来た。

「砂沙美ちゃん、その宿泊券、お姉ちゃんに出来ないかなあ。砂沙美ちゃんには、お小遣いを沢山、たくさんあげるからさあ。ちょっとお姉ちゃんに出来ないかなあ」

まさに猫撫で声で魍呼が言えば、魍呼を突き飛ばして阿重霞が砂沙美にゴマをする。

「砂沙美、それはあなたにはふさわしくないわ。魍皇鬼とあなたが行って、行き方も分からないでしょう。ほら、それは大事な金券ですからお姉様が預かってあげます」

砂沙美が困惑しながら二人を見比べていると、案の定、二人は互いに体を押しやり喧嘩になった。

「おめーもしつこいな！何だよ、預かりますって。そんな事言っつて、お前、使っちゃうつもりだろう。居るんだよなあ、そういう意地汚い身内って。あーやだやだ」

「なっ何よ！そういう貴女こそ、お小遣いと云言っつて嘘でしょう。どうせ貴女の事だから、何処かの銀行を襲っつて来て、そのお金を砂沙美に渡すんでしょう。そんな汚いお金、砂沙美に渡さないで頂戴！」

「何だとお！」

「何よ！」

二人は睨み合い、掴みかかっている。美星が間に立ち、オロオロとしているが、全く頼りなく、役立ちそうには無い。

「大体ね、考え方が浅ましいのよ。砂沙美の当てた宿泊券で天地様と二人で旅行に行こうだなんて。自力で何とかしなさいよ、自力で」

「お前こそ、妹の金券狙うなんて随分と卑怯じゃねえか」

「私は天地様に日頃のお疲れを癒して頂こうと思って…」

「だったら、お前が券を預からないで、砂沙美と天地が行けば良いだろう」

「ムッ！」

「まあまあお二人とも、幾らペア宿泊券が欲しいからって喧嘩は良くないですわ」  
ズバリ本音を美星に言われた阿重霞と魍呼は、キッと美星を睨んだ。

「もういいよ！皆、勝手なことばかり言って！そうやってずっと喧嘩してなよ」

そう叫ぶと、砂沙美は呆気にとられている二人を残して家を出た。玄関の戸を閉める時、廊下から阿重霞と魍呼が声を掛けて来た気がしたが、それも無視した。魍皇鬼だけが砂沙美の後を追って来た。

歩いて歩いて、気が付いたら榎木神社へと上る石段の上まで来ていた。少し歩き疲れた砂沙美はそこで一度、座って休むことにした。

「みんな、砂沙美の事なんて考えてくれていないんだから…少し酷いと思わない？魍ちゃん」

魍皇鬼は心配そうに砂沙美の顔を見上げながら、みゃあと悲しげに鳴いた。

「もう少し、砂沙美の事も見てくれればいいのに…」

冷たい風が足を駆け抜けて行く。

「おーい、砂沙美ちゃんどうしたんだい？こんな所で」

神社の掃除が終わった天地がこちらへと下りてくる。砂沙美は振り返り、天地を迎えた。

「あのね…天地兄ちゃん…」

そのまま階段に腰をかけ、砂沙美は天地に居間での出来事をひとしきり話した。すると

天地は、それは酷いねと砂沙美を慰めた。

「そうでしょう？」

「うん、それは酷いよ。魍呼も阿重霞さんも自分達の事ばかり考えて！」

「そうなの」

天地は憤慨し、砂沙美はやっぱり分かってくれるのは天地兄ちゃんだなと思いつつ頷いた。

「砂沙美ちゃんをないがしろにしすぎだ」

「うん」

「大体、あいつら喧嘩しすぎなんだよ。いつもいつもくだらない事で！砂沙美ちゃん、今日という今日は俺があいつらをきちんと叱るからね。全くもう！金券ひとつの事で砂沙美ちゃんに迷惑かけて！」

天地は砂沙美を不憫に思っただけで、砂沙美はスッと立ち上がると「帰る」

と呟いてスタスタと階段を下りた。慌てた天地は砂沙美の後を追いつ

「え？何か俺、気に障るようなこと言った？」

と尋ねた。すると砂沙美はくるりと振り返って天地に言った。

「天地兄ちゃんも砂沙美の事を分かってきてくれないのね」

怒った砂沙美の顔を見つめ、天地はポカンと立ち止まるしかなかった。

家に帰ると、丁度、鷺羽が台所から出て来た。この際だから鷺羽にも愚痴ってみようかと思っただけが、先程の天地を思い出して、砂沙美は諦めて何も言わない事にした。すると、マグカップ片手に廊下で砂沙美とすれ違った鷺羽が声を掛けて来た。

「砂沙美ちゃん、良かったじゃない。当たったのね、福引き」

どうせ魍呼達に聞いたのだらうと思いつき、砂沙美は頷くだけにした。しかし、鷺羽は、研究室の扉を開けながら

「良かったじゃない、サランラップが当たって」

と、笑顔を返してきた。

「鷺羽お姉ちゃん！」

その瞬間、砂沙美は鷺羽に飛びついた。その拍子に鷺羽の持つマグカップの中の珈琲が零れそうになり、鷺羽は何とか体勢を立て直した。涙目で喜んだ砂沙美は顔を上げると鷺羽を見た。

「鷺羽お姉ちゃんだけだよ。鷺羽お姉ちゃんは砂沙美の事、分かってくれていたんだね。ありがとう！」

と鷺羽の体に顔を埋めた。その声を聞いて、魍呼達が居間から顔を出した。マグカップ片手に困る鷺羽と、泣いて喜んでる砂沙美の図はどことなくシニールだった。

「ラップが欲しかったんですって」

「ラップ？」

「ラップが欲しくて、ずっと困っていたのに、だれもその事に気付いてくれなくて、やっと福引きで当たったから、嬉しくてその報告をしたかったんですって」

「ラップなんて買えば良いじゃねえか」

「そういう事ではなく、大事なのは、如何に皆が砂沙美ちゃんの事を見てくれているかかって言う事なんじゃないんですか？」

「ふーん。んなの、言わなきゃ分からねえよな」

機嫌の直った砂沙美が、鼻歌交じりに夕飯を作る姿を覗き見ながら、阿重霞、魍呼、美星の三人は呟いていた。

「言わなくても、分かってくれたいんですよ」

珈琲片手に新聞を広げて読んでいた鷺羽が視線は新聞に向けたまま、静かに言った。

「…面倒臭い奴だな。おい、阿重霞」

「何よ？」

「お前に比べて、砂沙美はまだマシかと思ってたけど、あいつ、お前の影響受けて、更に手に負えない奴になっちまったんじゃないか」

「なっ！何よ、失礼ね。何で私の影響を受けると手に負えなくなるのよ」

「だって、お前、結構思い込み強いしさ、くだらない事でギャーギャー言うじゃねえか」

「何ですって！」

「お二人とも、もう喧嘩はお止め下さい」

美星が二人の仲裁に入ると、砂沙美を手伝っていた天地が、台所から顔を出した。

「ほら、そんなところで喋ってないで、食卓片付けたりしてくれよな」

お盆を持った天地が声を掛けると、それに続いて砂沙美も顔を出した。

「もう、皆、喧嘩ばかりしてたら、お夕飯抜きにするからね」

砂沙美は言い、卓袱台を拭くと、

「そうそう、今日は皆がずっと食べたいって言ってたものだからね」

と、台所へ戻って行った。

「おい、食べたかったものって何だよ？」

「知らないわよ」

「なんでしたっけ？」

「おいおい、またあたし達が分かってくれないって、あいつ泣くぞ」

「そのうち、お料理の味の感想を言うのも、ビクビクするようになるわね」

鷺羽がキツパリ言い、新聞を畳むと、嘸呼、阿重霞、美星は項垂れて溜め息を吐く他なかったのである。